

他者操作方略に至るまでの過程の検討

— 認知傾向と精神的健康から —

筑波大学大学院 (博) 人間総合科学研究科 寺島 瞳

筑波大学心理学系 小玉 正博

An examination of the processes leading to the manipulation of others: From the perspectives of cognition tendency and mental health

Hitomi Terashima and Masahiro Kodama (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

This study examines the processes leading to manipulative strategies. Based on Ellis's (1988) model of Rational Emotive Behavior Therapy, we have constructed and examined a model of how cognition influences emotional and physical reactions and also how cognition influences manipulative strategies through emotional and physical reactions. We measured cognitive tendency with an anti-stress cognitive tendency and emotional and physical reactions with the General Health Questionnaire (GHQ). Two-hundred-and-thirty-five Japanese university students participated in this study. A path analysis model was used to predict manipulation strategies from the mental health and anti-stress cognitive tendency data. The results indicate that the cognitive tendency to focus on small things increases anxiety, and that the increased sense of anxiety leads to manipulations in order to obtain emotional support from others. Moreover, unyieldingness reduced manipulations to obtain instrumental support from others, while liberal cognition reduced manipulations to obtain emotional support. In particular, the relation between liberal cognition and manipulative strategies observed in this study highlights the need for future research on this relationship.

Key words: manipulation, manipulative strategies, mental health, anti-stress cognitive tendency

カウンセリング場面では重要な他者との間で操作的な関係性を体験している・してきたことへの気づきが、一番インパクトを持って取り上げられるとされている(無藤, 2002)。他者を操作する, もしくは他者に操作されるという現象は日常の対人場面において多く生起していると考えられるが, これまで十分な検討は行われてきていない。

臨床群における他者を操作する傾向としては Manipulation¹⁾があげられるが, その用語の用いられ方が一貫していないという指摘が数多くある(Bursten, 1972; Hofer, 1989)。そこで, 寺島・小玉(2004)は, 臨床群における Manipulation に関する

記述をまとめ, その結果 “利己的で高圧的に他者をコントロールして自己の利益を得ようとする行動” と “他者からのケアを引き出そうとする行動” という2側面に集約されることを示した。一方で, 健常群における他者を操作する傾向としてはマキャベリアニズム (Cristie & Geis, 1970) があげられる

1) Manipulation は, 日本においては, “操縦” (松本・石坂・金, 1988), “他者操作性” (皆川, 1990), “対象操作” (伊藤, 1996) などさまざまな訳語があてられており, 定訳がない。よって, 原語の Manipulation を用いてあらわすこととする。

が、マキャベリアニズムに関しては、女性が周囲を操作する傾向を捉えきれていないという指摘がある (Singer, 1964; McHosky, 2000)。そこで、寺島・小玉 (2004) は臨床群における Manipulation の概念を参考にしながら、健常群における他者を操作する傾向を包括的に測定する尺度を開発した。その際、Manipulation が心理社会的な策略であるという Clair (1966) の指摘を受け、その概念を“他者操作方略”と命名した。本研究においても寺島・小玉 (2004) にならい、健常群における他者を操作する傾向を“他者操作方略”とあらわすこととする。寺島・小玉 (2004) の結果によると、自己の優越性をアピールすることによって相手に何かをさせたり思わせるよう仕向ける他者操作方略と、自分が相手より下位の立場にあることをアピールして相手からのケアを引き出そうと仕向ける他者操作方略の2つの側面があることが明らかになった。前者は臨床群における Manipulation の記述の“利己的で高圧的に他者をコントロールして自己の利益を得ようとする行動”に、後者は“他者からのケアを引き出そうとする行動”に類似しており、健常群にも臨床群と同様の他者操作方略が存在することが確認された。さらに上記の2側面に加えて、“他者の行動面の操作”と“他者の感情面の操作”の2側面があることも新たに示された。よって、他者の“行動面”もしくは“感情面”を“他者より優越の立場から”もしくは“他者より卑下の立場から”操作するといった、組み合わせる4種類の操作があることが明らかになった。他者操作方略尺度ではそれぞれの側面は“自己優越的行動操作”“自己卑下の行動操作”“自己優越的感情操作”“自己卑下の感情操作”の4下位尺度によって測定される。

他者操作方略の概念の元となった Manipulation について、Bowers (2003) は、Cohen & Taylor (1972) による長期監禁に対する適応の研究を参考にして、病理的な行動ではなく、他者からの尊敬を得られない場面に長期間おかれた場合のごく自然な反応であると述べている。つまり、Manipulation という行動は、自分の意思に反した拘束によって自己を見失う危険が生じた場合、その中で生き延びるための技術を身につけた結果であるといえる。さらに、Rawlins & Heacoccl (1993) も、Manipulation は学習された結果起きる行動であると述べている。以上のことから、Manipulation は困難な状況におかれた場合に身を守る方法として学習される行動であるといえる。他者操作方略は程度は異なるものの Manipulation の延長線上にある行動とされている (寺島・小玉, 2004)。よって、他者操作方略に関し

ても、自己を見失うような困難な場面に置かれた際に学習された行動であると言うこともできるだろう。

では、他者操作方略が困難な状況に置かれた際に学習される行動であるとするならば、他者操作方略はどのような過程を経て選択されるのだろうか。Ellis (1988) は、自らが創案した論理療法についてのより簡単で分かりやすい自助の本を書き、その中で思考と感情と行動との関係について改めて述べている。Ellis (1988) によると、なんらかの刺激的な出来事は直接に感情的な反応を引き起こすのではなく、思考を通して感情反応を引き起こし、また、思考を通じた反応である感情がその後の行動を選択する手がかりとなる。その過程は、人生における刺激的な出来事 (Activating Event) がビリーフシステム (Belief System) を通して、感情的な結果 (Consequence) を引き起こしているという ABC 理論と呼ばれており、さらにそのイラショナル・ビリーフを論駁する (Dispute) することで、効果的な感情や反応 (Effect) が得られるとされている。つまり、行動の選択にはその個人の思考パターンやそれによって引き起こされる感情が深く関わっているのである。この理論を参考にして他者操作方略に至る過程を考えた時に、人生の何らかの刺激的な出来事であると考えられる困難な状況に対する認知の仕方が、感情反応や身体反応を引き起こし、さらにその反応から他者操作方略という行動に至るといえるであろう。よって本研究では Ellis (1988) の理論に従って、認知の仕方が感情反応を介して、他者操作方略に至る過程について探索的に検討することを目的とする。論理療法では主に ABC 理論の“Consequence”は感情的な結果とされているが、感情が抑制されている場合は、思考が身体反応に影響する場合もありうるだろう。よって、本研究では身体的な反応が他者操作方略に与える影響についてもあわせて検討する必要があると考え、General Health Questionnaire (GHQ) を用いて、感情的・身体的反応の両方を測定して検討した。特に、他者操作方略が困難な状況において学習される行動であるという前提にたち、困難な状況における認知の仕方をとりあげて検討する。困難な状況における認知の仕方の測定については、“困難状況での不屈さ・信頼感・率直さなどの抗ストレス認知傾向を測定する尺度”を用いた。この尺度は、イラショナルなビリーフよりはむしろラショナルなビリーフについて測定している尺度である。これらの抗ストレス認知傾向が低いことがその後の感情的・身体的反応や他者操作方略という行動にどのような影響を及ぼして

いるかについて検討するために、本研究ではこの尺度を用いた。抗ストレス認知傾向の低さが不適応的な感情的・身体的な反応を引き起こして他者操作方略に至る場合には、これらの抗ストレス認知傾向を高めることが不適応的な感情的・身体的な反応を減らしたり、また他者操作方略という行動を選択しないために有効であるといえるだろう。

よって本研究では、困難な状況での抗ストレス認知傾向が、感情的、身体的な反応を通して、他者操作方略という行動の選択に影響を及ぼすという因果モデルを想定して、その影響を探索的に検討することを目的とする。

方 法

調査対象者

分析対象者は尺度の値に欠損値があったものを除外した関東圏内の計235名（男性114名、女性113名、未記入8名）。平均年齢は19.67（±1.19）歳であった。

調査方法

通常の授業時間内に質問紙を配布して調査を依頼し、回答終了後その場で回収した。

質問紙の構成

他者を操作する傾向 寺島・小玉（2004）の予備調査における“自分にとって都合の良い反応を引き出すようなコミュニケーションの仕方と聞いて思い浮かぶこと”という質問に対する自由記述の結果をもとに作成した他者操作方略尺度27項目6件法。寺島・小玉（2004）では“優越な立場もしくは卑下の立場から他者を操作するか”という軸と“相手に何らかの行動もしくは感情を喚起させようと操作するか”という軸の二軸で分かれる4つの下位尺度からなるとされており、各下位尺度名は“自己優越的行動操作”“自己優越的感情操作”“自己卑下の行動操作”“自己卑下の感情操作”である。“あなたは人という時に、以下の項目にあるような行動をどの程度しようとしたことがありますか。“よくある”“しばしばある”“たまにある”“あまりない”“めったにない”“まったくない”のうちあてはまるものに○をつけてください。”という指示で回答を求めた。

抗ストレス認知傾向を測定する尺度 困難状況での不屈さ・信頼感・率直さなどの抗ストレス認知傾向を測定する尺度（小玉・2005）を用いた。“あなたのものごとへの判断の様子についてうかがいます。以下のような質問について該当する数字に○をつけて下さい”という指示で回答を求めた。“あてはまる”“少しあてはまる”“どちらともいえない”

“あまりあてはまらない”“あてはまらない”の5件法である。

精神的健康 GHQ-28（中川・大坊、1985：28項目4件法）。“身体的症状”“不安と不眠”“社会的活動障害”“うつ傾向”の4下位尺度からなる。“この数週間の健康状態で、精神的、身体的問題があるかどうかおたずねします。右の質問を読み、最も適当と思われる答の右側の□を○で囲んでください。この調査はずっと以前のことでなく、2～3週間前から現在までの状態についての調査です”という指示で回答を求めた。点数が高いほどディストレス傾向が強いことを示す。GHQ採点法では4件法のうち点数の低い2つを0、高い2つを1と得点化されているが、本研究では点数の低いほうから1、2、3、4と得点化して分析に用いた。

結 果

各尺度の構成

他者操作方略尺度 本研究では寺島・小玉（2004）の予備調査をもとに項目を作成しているため、寺島・小玉（2004）の因子分析結果とは異なる因子構造になることも予想される。よって、他者操作方略尺度27項目について主因子法による因子分析を実施した。なお本研究の結果はSPSS 11.5J for Windows および SPSS Amos 4.0を用いて分析された。共通性が.30以下であった5項目を削除し、再度22項目について主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。固有値の推移から4因子解が適当と判断した。プロマックス回転後、因子負荷量を得た（Table 1）。

第1因子は、項目17「[すごいね]と言ってもらおうとして自分のすごいと思うところをアピールする」、項目4「ほめてもらおうとしてがんばっている自分をアピールする」など計6項目からなっており、自分が相手よりも上の立場にたつて自分の優越性をアピールすることで、他者に何らかの感情を喚起させようとコントロールする操作と考えられ、第1因子を“自己優越的感情操作”と命名した。第2因子は、項目26「同情してもらおうとして自分の失敗談を大げさに話す」、項目25「相手になくさめてもらおうとして自分の不運を大げさにぼやく」など計5項目からなっており、自分が相手よりも下の立場にたつて自らの能力や状況を低く見積もったものをアピールすることで、他者に同情感情を喚起させようとコントロールする操作と考えられ、第2因子を“自己卑下の感情操作”と命名した。第3因子は、項目11「頼みごとをことわりなくくさせようと

Table 1 他者操作方略尺度の因子分析結果(主因子法・プロマックス回転)

	因子負荷量				
	第Ⅰ因子	第Ⅱ因子	第Ⅲ因子	第Ⅳ因子	共通性
17. 「すごいね」と言ってもらおうとして自分のすごいと思うところをアピールする	.91	.02	-.06	-.09	.74
4. ほめてもらおうとしてがんばっている自分をアピールする	.83	-.14	-.18	.06	.50
5. 感心してもらおうとしてわざと相手の知らないことを言う	.66	-.04	.00	.18	.55
19. 感心してもらおうとしてひととは違うところをアピールする	.64	.15	.04	-.06	.56
14. ほめてもらおうとして自分の成功した話を大げさに言う	.54	.20	.19	-.17	.52
22. 驚かせようとして自分の体験を大げさに言う	.37	.24	.10	-.04	.36
26. 同情してもらおうとして自分の失敗談を大げさに話す	-.06	.89	.00	.06	.78
25. 相手になぐさめてもらおうとして自分の不運を大げさにぼやく	-.02	.85	-.02	-.08	.62
27. 心配してもらおうとしてつらそうなふりをする	.09	.74	-.12	.07	.64
18. 相手に「そんなことないよ」と否定してもらおうとして自分を卑下する	.30	.42	.07	-.02	.47
9. 同情してもらおうとして自分の欠点を大げさに言う	.09	.41	-.02	.30	.47
11. 頼みごとをことわりなくくさせようとして相手への昔の貸しをもちだす	.03	-.12	.83	-.06	.58
12. ことわりなくくさせようとして都合がよいことを確認した後に頼み事をする	-.17	.20	.73	-.11	.50
1. 自分が気のすまない仕事をやってもらおうとして過去に相手に着せた恩をもちだす	.10	-.23	.56	.23	.43
13. 仕事をしてもらおうとして相手にとって都合のよい交換条件を出す	.04	.07	.56	-.14	.29
8. 仕事をしてもらおうとして「00はやってくれたのに」と別の友人をひきあいに出す	-.21	-.03	.51	.28	.37
15. 相手の動揺につけこもうとしてわざと嫌なことを言って怒らせる	.20	-.02	.36	.12	.31
7. 自分の仕事を手伝ってもらおうとしていかにも困っているふりをする	-.11	.01	-.03	.90	.70
6. 相手に仕事を代わってもらおうとして「自分にはできない」というふりをする	.06	-.02	-.04	.71	.51
20. 相手に仕事を代わってもらおうとして調子悪そうなふりをする	.02	.25	.02	.46	.44
23. 自分の仕事を手伝ってもらおうとして忙しいことをアピールする	.14	.04	.25	.35	.40
16. 「休んでいいよ」と言ってもらおうとして疲れたふりをする	.23	.24	.04	.29	.45

して相手への昔の貸しをもちだす”, 項目12 “ことわりなくくさせようとして都合がよいことを確認した後に頼み事をする” など計6項目からなっており, 自分が相手よりも上の立場にたつて自らの優越性をアピールすることで, 何かをしてもらおうと他者の行動をコントロールする操作と考えられ, 第3因子を“自己優越的行動操作”と命名した。第4因子は, 項目7 “自分の仕事を手伝ってもらおうとしていかにも困っているふりをする”, 項目6 “相手に仕事を代わってもらおうとして「自分にはできない」というふりをする” など計5項目からなっており, 自分が相手よりも下の立場にたつて自らの能力や状況を低く見積もったものをアピールすることで, 何かをしてもらおうと他者の行動をコントロールする操作と考えられ, 第4因子を“自己卑下の行動操作”と命名した。各因子のCronbachの α 係数は, “自己優越的感情操作”が.86, “自己卑下の感情操作”が.87, “自己優越的行動操作”が.77, “自己卑下の行動操作”が.80と高い数値であったことから, いずれも内の一貫性のあることが確認された。以下の分析には各下位尺度の合計得点を用い

た。

抗ストレス認知傾向を測定する尺度 抗ストレス認知傾向を測定する尺度に関しては, 先行研究において因子分析がなされていなかったため, 本研究では構造を確認するために主因子法・プロマックス回転による因子分析を実施した。固有値の推移から4因子解が適当と判断した。プロマックス回転後, 因子負荷量を得た (Table 2)。

第1因子は, 項目1 “大変なことや面倒なことには深入りしない (逆転項目)”, 項目20 “ものごとがうまく行かないときでも何とかしようと思ってみる” など計6項目からなっており, どんな困難にぶつかっても意志を貫いてやり抜こうとする認知傾向を示すと考えられ, 第1因子を“不屈さ”と命名した。第2因子は, 項目3 “誠意をもって取り組んでいけば人は認めてくれる”, 項目15 “人からの励ましで勇気づけられることが多い” など計8項目からなっており, 自らの努力の結果や他者のことを信頼して仕事に取り組もうとする認知傾向を表すと考えられ, 第2因子を“信頼感”と命名した。第3因子は, 項目6 “ものごとに取り組むときはよくその意

Table 2 困難状況での不屈さ・信頼感・率直さなどの抗ストレス認知傾向を測定する尺度（主因子法・プロマックス回転）

	因子負荷量				
	第I因子	第II因子	第III因子	第IV因子	共通性
1. 大変なことや面倒なことには深入りしない*	.79	-.09	-.15	-.26	.48
20. ものごとがうまく行かないときでも何とかしようとねばってみる	.78	.02	.03	-.06	.62
13. ダメかも知れないと思うことでも一応トライしてみる	.68	-.08	-.04	.21	.51
8. 人が弱音を吐くような場面でも何とかやり過ごせる	.57	.07	-.03	.12	.41
19. いったん決めたことは、できる限りやり通そうとする	.55	.05	.29	-.08	.52
2. むずかしそうなことでも積極的に挑戦してみる	.39	.03	.30	-.09	.33
3. 誠意をもって取り組んでいれば人は認めてくれる	.00	.72	-.10	-.04	.44
15. 人からの励ましで勇気づけられることが多い	-.14	.71	.02	-.15	.40
9. 努力は必ず報われると信じている	.22	.65	-.16	-.13	.47
14. 人はみな何かのかたちで支えあっていると信じている	-.06	.61	.03	.17	.46
10. どんな仕事でも無意味なものはない	-.05	.50	.04	.06	.28
16. 人の好意には素直に感謝する	.02	.38	.13	.09	.26
18. どんなかたちであれ、無駄な人生というものはない	.08	.38	.16	.12	.34
4. 間違いを指摘されたら素直に認めることができる	.00	.21	.01	.17	.10
6. ものごとに取り組むときはよくその意味や目的について考える	.08	-.10	.69	-.09	.43
17. 行きづまったときは、まず何を優先すべきかを考える	-.16	-.01	.59	.15	.35
7. 何が世の中の役に立つのか、よく考える	.02	.13	.46	-.10	.27
5. 小さなことにはこだわらないほうだ	-.18	-.04	-.03	.79	.56
12. 多少のことではへこたれない	.48	-.02	-.08	.53	.59
11. ここ一番という時にはすぐ集中する	.18	.14	.07	.25	.23

注) *は逆転項目

味や目的について考える”，項目17“行きづまったときは、まず何を優先すべきかを考える”など計3項目からなっており、何かに取り組む際にじっくりとよく考えるという認知傾向を表していると考えられ、第3因子を“熟考”と命名した。第4因子は、項目5“小さなことにはこだわらないほうだ”，項目12“多少のことではへこたれない”など計3項目からなっており、余裕を持って目のことにはこだわらず、ゆったりとしているといった認知傾向を表していると考えられ、第4因子を“鷹揚さ”と命名した。各因子のCronbachの α 係数は、“不屈さ”が.81，“信頼感”が.77，“熟考”が.59，“鷹揚さ”が.56であった。“熟考”と“鷹揚さ”の値は若干低いため、解釈に際しては慎重さを要するが、そのほか二つの下位尺度に関しては内の一貫性のあることが確認された。以下の分析には各下位尺度の合計得点を用いた。

なお、精神的健康を測定するGHQ-28に関しては因子分析は行わず、中川・大坊（1985）に従い“身体的症状”“不安と不眠”“社会的活動障害”“うつ傾向”の4下位尺度の合計得点をそれぞれ算出した。

抗ストレス認知傾向と精神的健康が他者操作方略に及ぼす影響のパス解析モデルの検討

抗ストレス認知傾向と精神的健康が他者操作方略に影響を及ぼすというパス解析モデルを構成して、SPSS Amos 4.0を用いて分析し、検討を行った。また、分析の際、母数の推定方法には最尤法を用いた。このモデルにおいては、精神的健康の各下位尺度の誤差間、および他者操作方略の各下位尺度の誤差間に共分散を仮定した。有意水準5%以上のパスを削除してモデルを修正し、最終的にFig.1のモデルが採用された。適合度は $\chi^2(40)=46.65$ 、GIF=.98、AGIF=.95、CFI=.99、RMSEA=.00であり、十分な値が得られた。

まず、他者操作方略に対して精神的健康を介さずに直接影響を及ぼしていた抗ストレス認知傾向の変数は不屈さおよび信頼感・率直さであった。不屈さの高さは自己卑下の行動操作を低め、信頼感・率直さが高いと自己優越行動操作を低めていた。また、鷹揚さは精神的健康の不安と不眠を介して他者操作方略の感情操作2種類に影響を及ぼしていた。鷹揚さが低いと不安と不眠を高め、不安と不眠が高いと自己優越的感情操作と自己卑下の感情操作が高まる

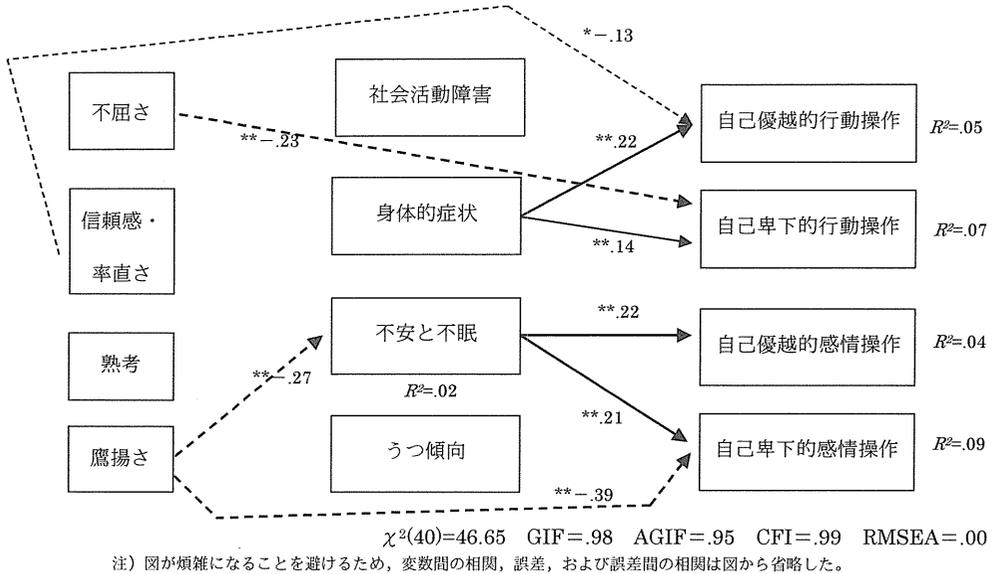


Fig. 1 抗ストレス認知傾向と精神的健康が他者操作方略に及ぼす影響のパス解析モデル

という結果であった。また、鷹揚さは自己卑下的感情操作に直接影響を及ぼしていた。鷹揚さが高いと自己卑下的感情操作を低めていた。精神的健康が他者操作方略に及ぼす影響は、身体的症状が高いと自己優越的行動操作および自己卑下的行動操作をそれぞれ高めるという結果であった。さらに、不安と不眠が高いと自己優越的感情操作と自己卑下的感情操作をそれぞれ高めていた。

考 察

本研究では、論理療法における Ellis (1988) の考え方を元に、他者操作方略を用いるに至るまでの認知傾向と精神的健康の影響について、モデルを構成して検討した。その結果、まず認知傾向から精神的健康を介して行動に至る流れには、鷹揚さから不安と不眠へのパスを介して他者の感情面への操作への影響が見られた。つまり、鷹揚でなくこまかなことにこだわるのが、不安感情を高めて、さらに他者から情緒的なサポートを得ようと他者を操作するという行動に至ることが考えられる。他者から情緒的なサポートを得るような操作を行わないためには、不安感情を感じないように、困難な状況において小さなことにこだわらずにゆったりとした考え方をすることが必要であるといえるだろう。また、鷹揚さは自己卑下的感情操作にのみ直接の負の影響を及ぼしていた。鷹揚に考えることで特に他者から同

情心を引き出すような操作を行わなくなると考えられる。

そのほかには抗ストレス認知傾向から精神的健康へのパスは見られなかった。Ellis (1988) は、思考から引き起こされる結果としては、主に不安などの感情をあげている。不安などの感情以外の身体的な反応や日常生活における障害などは、認知傾向からは影響を受けないのかもしれない。認知の仕方が即座に影響を及ぼすのはやはり、感情反応であると考えられ、その感情反応が長期に至って慢性化した場合に、身体的反応や日常的な活動の障害に影響を及ぼすのであろう。本研究においては検討しなかったが、感情反応と身体反応間のパスも想定したモデルを構成して検討する必要があったのかもしれない。

精神的健康を介さずに他者操作方略に直接影響を及ぼしていたのは、不屈さと信頼感・率直さであった。不屈さは自己卑下的行動操作に、信頼感・率直さは自己優越的行動操作に負の影響を及ぼしていた。不屈さは困難な状況にあっても何とかしようとする傾向を示しており、そのように考えれば、容易には他者に手助けを求めないものと考えられる。また、他者への信頼感・率直さが高いほど自己優越的行動操作を低めていた。他者への不信感と Manipulation との関連については先行研究において指摘されており (Hofer, 1989)、他者への不信感が高ければ、率直な形で他者に物事を頼むことができずに、操作という形でしか手助けを求

められないものと考えられる。逆に、他者への信頼感が高ければ、操作という方略には頼らずに、別の直接的な形で他者に物事を頼むことができるのかもしれない。

さらに精神的健康から他者操作方略の影響は、身体的症状が他者の行動面への操作、不安と不眠が他者の感情面への操作にそれぞれ正の影響を及ぼしていた。身体的症状がある場合には他者から道具的なサポートを引き出すような操作を行い、不安感情がある場合には他者から情緒的なサポートを引き出すような操作を行っていた。自らの不調と他者から引き出したいサポートが対応しており、反応によって行動が選択されていることを支持する結果であるといえる。

本研究では主に認知傾向が反応を介して行動に至るというモデルを想定していたが、実際に他者操作方略に至る間接効果があったのは鷹揚さのみであった。もともと論理療法におけるEllis (1988)の主張は、イラショナルなピリーフが感情や行動などの結果に悪影響を及ぼすためにイラショナル・ピリーフを論駁する必要があるといったものであり、ストレスに抗えるようなポジティブな認知傾向について想定していたわけではない。よって、反応としての精神的健康により影響を及ぼすと考えられる不適応的な認知傾向も同時にモデルに組み込む必要があったであろう。今後、検討すべき課題である。しかし、本研究で得られた抗ストレス認知傾向と他者操作方略についての関連は、今後、認知傾向と他者操作方略との関連を検討していく上で重要な示唆であったと思われる。ポジティブな認知傾向の高さはいずれも他者操作方略という行動を低めており、困難な状況においてもポジティブに考えることは、他者を操作して何らかのサポートを引き出すといった行動を減少させることに役立つであろう。また、抗ストレス認知傾向のようなポジティブな認知傾向は、単なる論駁された後の認知傾向といったイラショナル・ピリーフの裏にはとどまらず、イラショナル・ピリーフとはまた別の次元にあるものと考えられる。よって、“不適応ではない”という認知傾向にとどまらず、“適応的である”といった側面の認知傾向についても今後さらに検討していくことで、他者操作方略という行動を選択しないために身に着けるべき認知傾向についての示唆が得られると考えられる。

引用文献

Bowers, L. (2003). Manipulation: searching for an

- understanding. *Journal of Psychiatric Mental Health Nursing*, 10, 329-334.
- Bursten, B. (1972). The Manipulative personality. *Archives of General Psychiatry*, 26, 318-321.
- Christie, R & Geis, F.L. (Eds.) (1970). *Studies in Machiavellianism*. Academic Press.
- Clair, H.R. (1966). Manipulation. *Comprehensive psychiatry*, 7(4), 248-258.
- Cohen, S & Taylor, L. (1972). *Psychological Survival: the Experience of Long-Term Imprisonment*. Pantheon Books, London.
- Ellis, A (1988). How to stubbornly refuse to make yourself miserable about anything-Yes! Anything! Carol Publishing Group, Inc. (エリス, A. 国分康孝・石隈利紀・国分久子 (訳) (1996). *どんなことがあってもじぶんをみじめにしないためには* 川島書店)
- Gunderson, J.G (1984). *Borderline personality disorder*. Washington DC: American Psychiatric Press Inc (ガンダーソン, J.G. 松本雅彦・石坂好樹・金吉晴 (訳) (1988). *境界パーソナリティ障害－その臨床病理と治療－* 岩崎学術出版社)
- Hofer, P. (1989). The role of manipulation in the antisocial personality. *International Journal of offender therapy and comparative criminology*, 33(2), 91-101.
- 小玉正博 (2005). 企業員の精神的健康と活力向上のための抗ストレス資源の解明とその開発に関する研究 平成14・15・16年度文部科学省科学研究補助金基盤研究(B)(2)研究成果報告書
- McHoskey, J.W. (2000). Machiavellianism and personality dysfunction. *Personality and Individual Differences*, 31, 791-798.
- 皆川邦直 (1990). 境界例の初期診断と対応 精神科治療学, 5, 749-756.
- 無籐清子 (2002). 個人カウンセリングにおけるアサーションの意味 平木典子・沢崎達夫・土沼雅子 (編) *カウンセラーのためのアサーション* 金子書房.
- 中川泰彬・大坊郁夫 (1985). *日本語版GHQ精神健康調査票手引き* 日本文化科学社
- Rawlins, R.P & Heacock, P.E. (1993). *Clinical Manuals of Psychiatric Nursing*. Mosby, St Louis, MO.
- Singer, J.E. (1964). The use of manipulative strategies: Machiavellianism and attractiveness. *Sociometry*, 27(2), 128-150.

恵 智彦・衣笠隆幸・伊藤 洸 (1996). 境界例と
その周辺 金剛出版
寺島 瞳・小玉正博 (2004). 他者操作方略尺度

作成の試み 筑波大学心理学研究, 28, 89-95.
(受稿3月22日: 受理5月18日)